

# ボランティア魂 第2回

「さんてつ・北リアス緑市」実行委員会 (久慈市)

## 三鉄の 早期復旧を願う



車内に置かれた「つながるんだるま」



▲津波で流された線路

◀ 普代駅に置かれた車両  
車内には「つながるんだるま」  
が並んでいるのが見える

### ●地域の小さな良さを発見する……

NPO法人久慈広域観光協議会で先頭に立って活躍する貫牛利一さんは、「よそのいいところばかりに目がいったこともありました。」と言う。ところが今は、「足元を見てみたとき、ここは、いいものだらけだなということが分かりました。それに気づいてから、地域づくりに奮闘するようになりました。小さなものからでも、地域の良さを伝えていこうと思えました。」と振り返る。

例えば、野田では昔、海水から塩を作って内陸に運んでいた。そういう先人が受け継いできたものを、今の時代につなげることが必要だと言う。昔の歴史を今によみがえらせて、未来につなげる活動が地域に求められていると熱意を示す。

### ●三陸鉄道は地域資源……

三陸鉄道が、公共交通として受け継がれてきた必要性を改めて問い直してみ、地域資源として地域の人が支えていくことが必要だと、貫牛さんの三陸鉄道への思い入れは熱い。「三陸鉄道の魅力を全国の人に伝えることによって、地元もいきいきすると思います。積み重ねてきたことが震災によってゼロになったショックもありますが、また積み上げていくのは地域の私たちでしかありません。前を向いて地域の人が活動することで、新しい地域ができていきます。動けば動くほど地域は元気になっていくものだと思じて、それこそ牛歩のごとく進んで行きたいです。」貫牛さんは三陸鉄道の復興に

力を注ぐ決意を語る。

### ●地域の「昔」に気づく……

被災を免れた路線は、震災の5日後に運行を再開した。「この運行によって、地域の私たちは復興に向けた勇気を与えてもらいました。まだ短い区間だけです。が、列車の音を聞くだけでも地域の人は勇気付けられています。」三陸鉄道は、地域の大きなよりどころになっているようだ。

「一人ひとりが地域の良さに気が付いて、それを伝えていく行動に移していくことが大事だと思います。」三陸鉄道以外にも、県北のこの地域にはたくさん海の幸、山の幸があることを貫牛さんは強調する。

### ●にぎわう

### 「さんてつ・北リアス緑市」……

6月から11月まで毎月1回、三陸鉄道の久慈駅などで「さんてつ・北リアス緑市」が開催され、地元の特産品や野菜、菓子などが販売された。このイベントは、NPO法人久慈広域観光協議会、久慈商店街、三陸鉄道、陽だまりW.A.T.Eなどが実行委員会を作り実施したもので、緑市では地域の特産物販売や餅まき大会が開かれるなど、にぎわいを見せた。また、このイベントに寄せられた義援金や収益の一部が三陸鉄道に贈られた。

NPO法人やませデザイン会議の川代明寛さんは、「三陸鉄道の復旧に向けた機運も高まり、同時に地域の活性化にもつながりました。復興を念願して来てい

ただいたお客さんと、出店者や商店街の皆さんがつながってもらえました。」と喜びを語る。

復興を祈念するユニークなイベントとして、野田塩を使ったおむすび作りコーナーが設けられた。これは、参加者が沿線の駅で採れる海産物などを具にして「陸中野田駅から先が結ばれるように」との願いを込めておむすびを作るイベントだ。野田村特産の福来豚(ふくぶた)を使った「復旧(ふく)サンド」も100個限定で販売され、人気を集めた。

### ●だるまで復旧を祈願……

なかでもユニークな取り組みは、さんてつ復旧祈願だるま「つながるんだるま」の製作・販売だ。三陸鉄道のレールをつなげようという思いからアイデアが生まれた。普代村銅屋の三陸鉄道普代駅には、震災から半年間、停車したままになっている車両がある。列車は震災時、乗客・乗員十数人を乗せて白井海岸駅から普代駅に向かっていた。列車自体は被災を免れたものの、前後の路線が被災したため、車両は普代駅に置かれたままになっている。「寂しい姿をどうにかしたいと思っていました。」と川代さんは振り返る。

この車両を復旧のシンボルにしようという願いのもと、車両の中に人が乗っているように「つながるんだるま」を飾るアイデアが生まれた。八戸や盛岡などからも参加した親子らがオレンジ色のだるまに「早く電車が通りますように」などとメッセージを書き、運転席や乗客の座